

平成30年度 秋季特別展

イセコレクション

至高の刺繍絵画

— 写実を極めた近代日本の逸品 —

会期：平成30年10月20日(土)～12月16日(日)

【Ⅰ期】10月20日(土)～11月17日(土)

【Ⅱ期】11月18日(日)～12月16日(日)

1. はじめに

仏教の伝来と共に興隆した刺繍文化。明治に入り、繊細な花鳥図や写実的な風景図などの意匠が図案として採用されるようになりました。独自の染色技術で染め上げた光沢と質感をもつ絹糸で縫い表され、絵画と見紛うそれらの作品は「刺繍絵画」や「繡畫（ぬいえ）」などと呼ばれました。

当時刺繍絵画は欧米で高く評価され、輸出向けに多くの作品が制作されました。国内外の博覧会にも出品し受賞を重ね、外交の場で王家や外交使節への贈答品に用いるなど国内においても重用されていきました。

展覧会では、世界最初の公立博物館である英国アシュモレアン美術・考古学博物館でも公開された、イセ文化財団が所有する刺繍絵画の数々を展示します。

2. 海を渡った刺繍

刺繍は仏教や衣服、冠婚葬祭時などの装飾として日本人の生活に浸透し、江戸時代まで特に大名や寺社からの注文が多く寄せられたといわれます。しかし幕末以降、刺繍の依頼が途絶え始めたことで、それまで刺繍業に従事していた職人たちは新たな市場開拓に奔走しました。

幕末の頃に刺繍業を生業としていた田中利兵衛・利七親子は、海外の商人に刺繍を販売し、刺繍の見本を

送付したことで海外から刺繍の注文が多く寄せられたと伝わります。このほか当時刺繍業に携わる人々は、販路の開拓や売り込みの場として万博などにも多くの刺繍作品を出品しました。明治44年(1911)には、第一位の輸出高(100万弱)を記録しています。

3. 室内装飾へ

前近代の刺繍は意匠化された図案をおおらかな縫いで表すのが主流であったのに対し、明治以降は絵画的意匠を写実的な縫いで表す刺繍がもてはやされるようになりました。当時の刺繍には西洋の求める要素が重視されており、結果、冠婚葬祭などの用途から離れ、純粋に室内装飾を担う刺繍製品が誕生しました。

「刺繍絵画」は室内装飾として海外において高く評価され、海外向けの重要な輸出品として注目されました。下絵制作に一流の画家が参画するようになると絵画的意匠の品質が向上しました。それに伴い職人の育成も積極的に行われ、繊細な刺繍作品が生み出されていきました。

開国から昭和初期までの限られた期間に輸出された刺繍絵画。その存在は現在ではあまり認知されていませんが、近代日本の重要な輸出品の一翼を担っていたといえます。

4. 展示作品 ※番号は列品順



1 風龍図刺繍壁掛け【1期】 1800年代後半

刺繍:絹に絹糸・綿糸・麻糸・金糸／縁取り:金襴

2頭の龍の体からは炎が放出し、渦巻く風と雲が大胆な図案で描かれている。2頭の内一頭は龍の頭、鳥のような羽と足、そして魚のような尾を持った姿で描かれているが、この龍は「飛龍(応龍)」と呼ばれる龍の子どもで、火伏せ(火防)の意味を示す。背景の風や雲は粗めの綿や麻の糸で駒縫いを施すなど様々な刺繍の技法が使われている。



2 骸骨図刺繍画【I期】 1800年代後半

正座をして三味線を演奏する骸骨（左）と扇を手に舞う骸骨（右）。
 どちらも男性で、能の演者とする説があるが詳細は不明である。この
 図案は1889年より呉服商飯田新七の元で仕事をしていた日本画家、
 竹内栖鳳（1864-1942）の作である可能性が高く、飯田新七によって
 製作されたと考えられている。骸骨の骨や三味線の側面の輪郭を非常
 に細い絹糸で刺し縫いし、巧みに陰影をつけている。

3 双龍図刺繍壁掛け【Ⅱ期】

1800年代後半

刺繍:絹に絹糸・綿糸・金糸／縁取り:金襴

知恵の宝珠である「如意宝珠」を持った2頭の龍。龍は吉祥を連想させるため日本美術では人気の画題であり、その独特な世界観は西洋人の興味をそそったようで明治の輸出刺繍の画題でも人気だったとされる。鱗のある胴体と顔は立体感を出すために、詰め綿とまるめた紙の上から金糸で駒縫いを施している。ふさふさした眉毛は撚糸を駒縫いし、髭、牙、舌は刺し縫いで作られている。



4 麒麟図刺繍壁掛け【Ⅱ期】

1800年代後半

刺繍:絹に絹糸・金糸／縁取り:綿

色の異なる4頭の麒麟が刺繍されている。麒麟は鹿に似た角のある伝説上の生き物で健康と幸福の象徴である。中心の円は真珠を表現している。麒麟は撚糸と平糸の両方を用いて刺し縫いと駒縫いを組み合わせた刺繍を施し、顔には奥行きを出すために詰め綿をしている。壁掛け以外にもテーブルクロスとしても使用された。



5 双鳳凰図刺繍壁掛け【I期】 1800年代後半

刺繍:絹に絹糸・金糸／縁取り:綿

鳳凰は不死を象徴する伝説上の生き物で芸術作品によく見られる。奥には桐の木が描かれている。鳳凰は桐の花から取れる露をすすすることで不死を得たと信じられているためしばしば桐の木と一緒に描かれる。この作品の最も豪華な特徴は背景の金糸の渦巻き模様である。平糸と撚糸が使われ、鳳凰の頭の部分には相良縫いでさらなる風合いを加えている。



7 水辺に孔雀図刺繍壁掛け【1期】 1800年代後半～1900年代前半

刺繍:絹に絹糸・金糸/縁取り:金襴

牡丹の咲く水辺の岩に立つ一対の孔雀。主に平糸と撚糸の刺し縫いで作られている。岩の陰影、特に波立つ水は繊細で、繊細な注意が払われているのが分かる。前景の密集した草地にはまつり縫いを巧く用いている。孔雀の美しい姿が魅力の作品である。



6 藤花孔雀図刺繍壁掛け【Ⅱ期】

1800年代後半～1900年代前半

刺繍:絹に絹糸／縁取り:金襴

孔雀が藤の下で川のほとりの岩の上に立っている。藤と葉の部分は平糸で刺繍されており、葉脈は撚糸が用いられている。藤の花びらと岩の淵は詰め綿されており立体感を演出。川の水しぶきには相良縫いが施され、川の流れが表現されている。



8 蓮花双龍図刺繍壁掛け【Ⅱ期】

1800年代中～後半

刺繍:絹に絹糸・金糸／縁取り:絹

鳩や鳥や花が蓮の形の丸窓の周りに描かれ、丸窓の中には炎に包まれた雌雄の龍が描かれている。雄の龍は金の髭と一本の曲がった角、尾には仏教の刀が刺さっている。雌の龍は白い髭とまっすぐな角があり、前足の爪で知恵の真珠を掴んでいる。刺繍の裏側は仏教の僧侶である龍巖十世が書いた奉納のための説明書きがある。それによるとこの刺繍は元々仏教の前卓の為の敷物であったとされている。

10 牡丹孔雀図刺繍壁掛け【Ⅱ期】

1800年代後半～1900年代前半
刺繍:絹に絹糸・金糸／縁取り:金襴

牡丹の咲く水辺の岩に立つ雌雄の孔雀。平糸と撚糸を使った刺し縫いと駒縫いを組み合わせている。背景はNo.12の作品と類似しており、葉は平糸で縁取りし、岩の部分には相良縫いを施している。海外ではベッドカバーとしても使用されていた。



11 総花鷺図刺繍壁掛け【Ⅱ期】

1800年代後半～1900年代前半
刺繍:絹に絹糸／縁取り:金襴

美しい花に囲まれた小川に4羽の鷺が描かれている。鷺は日本画や版画で人気の図柄で、柳の木や芦や菖蒲とともに描かれることが多い。主に刺し縫いで作られ、艶やかな平糸が鳥の羽根や牡丹、菖蒲の花びらに用いられている。



9 桜花孔雀図刺繍壁掛け【I期】 1990年代

銘：四角「画師 三木」／壺型「繡師 住山」

刺繍：絹に絹糸・金糸／縁取り：金襴

桜の木にとまった雄の孔雀と牡丹に囲まれた雌の孔雀が描かれている。桜は八重桜で明治初期にとっても人気があった意匠である。生地に多様な質感をもたせるため、平糸（尾羽の目と花びら）と撚糸（土手）を混ぜて使っている。詰め綿は孔雀の胴体と花びらを立体的に見せるために入れられている。

左下の印は本作品を手掛けた画師と繡師の銘である。住山は京都の装飾染織の製作者で、意匠家である三木に関しては不明である。



12 猿鷹凶刺繍壁掛け【Ⅱ期】

1800年代後半～1900年代前半

刺繍:絹に絹糸・金糸／縁取り:金襴

猿の家族を攻撃する鷹が描かれている。猿と岩は撚糸の刺し縫いが施され、背景は光沢のある平糸で刺繍された牡丹の花と葉で覆われている。鷹の羽には詰め物をして縫い付けた層の上からさらに平糸で刺繍を施し、ボリュームと柔らかさを表現している。海外ではベッドカバーとしても使用されていた。

14 獅子牡丹凶刺繍壁掛け【Ⅱ期】

1800年代後半～1900年代前半

刺繍:絹に絹糸・金糸で刺繍／縁取り:絹

獅子の家族が刺繍されており、周囲には大輪の牡丹が咲いている。獅子と牡丹は日本美術の伝統的な題材で、獅子が「動物の王」、牡丹は「花の女王」といわれる。多様な縫い方と色や太さの違う糸を使うことによって、山景の異なる風合いを表現している。





13 鶏牡丹図刺繍壁掛け【Ⅱ期】 1800年代後半～1900年代前半
刺繍:絹に絹糸／縁取り:金襴

鶏は伝統的に牡丹と一緒に用いられる題材である。雄鶏は幸運、牡丹は富を表す。また、夫婦仲が良いことの象徴ともいわれている。主に平縫いと刺し縫いでできており、牡丹の花と葉には平糸が用いられ、大きな鶏の尾羽の中心の線は丸めた紙の紐でできている。

列品一覧

No.	期 間	名 称	員 数	法 量 (cm)	年 代
1	I期	風龍図刺繍壁掛け	1枚	232.0×172.0	1800年代後半
2		骸骨図刺繍画	1双	各85.0×45.8	
3	II期	双龍図刺繍壁掛け	1枚	217.5×152.0	
4		麒麟図刺繍壁掛け	1枚	157.0×154.5	
5	I期	双鳳凰図刺繍壁掛け	1枚	130.0×194.0	
6		藤花孔雀図刺繍壁掛け	1枚	207.0×159.0	
7		水辺に孔雀図刺繍壁掛け	1枚	170.0×115.0	1900年代
8	II期	蓮花双龍図刺繍壁掛け	1枚	221.0×156.0	1800年代中～後半
9		桜花孔雀図刺繍壁掛け	1枚	300.0×199.0	1900年代
10		牡丹孔雀図刺繍壁掛け	1枚	222.5×150.0	1800年代後半～1900年代前半
11	I期	総花鷺図刺繍壁掛け	1枚	209.0×150.0	
12		猿鷹図刺繍壁掛け	1枚	221.0×142.0	
13	II期	鶏牡丹図刺繍壁掛け	1枚	207.0×135.0	
14		獅子牡丹図刺繍壁掛け	1枚	231.5×157.0	

※展示作品は全てイセ文化財団蔵

イセコレクションとは

「森のたまご」で知られるイセ食品（埼玉県鴻巣市）を中核としたイセグループの伊勢彦信会長が半世紀以上にわたって収集した日本有数の美術コレクション。数千点に及ぶ美術品には、ピカソ・モネ・セザンヌなどの近代洋画、中国歴代王朝の陶磁器、琳派などの日本美術から、現代美術まで網羅されている。

愛荘町立歴史文化博物館

平成30年度秋季特別展

イセコレクション 至高の刺繍絵画

—写実を極めた近代日本の逸品—

＜展示解説・列品一覧＞

【参考文献】

◇図録類

アシュモレアン美術・考古学博物館（2012）『Ornamental Textiles from Meiji Japan』

松原 史（2016）『明治の輸出刺繍—西洋との交流で花開いた刺繍絵画の世界—』

北区飛鳥山博物館編『糸と光と風景と—刺繍を通してみる近代—』12-14頁

◇論文

松原 史（2012）『近代「刺繍絵画」の誕生—近代的特徴と前近代からの系譜—』

『ART RESEARCH』vol.13,3-15頁

編集・発行：愛荘町立歴史文化博物館

電話：0749（37）4500

発行日：平成30年（2018）10月20日

©2018 愛荘町立歴史文化博物館